

完了報告書（平成 22 年度）

提出者 TOJIRAKARN MASHIMA

提出年月日 2011 年 3 月 31 日

【プロジェクト名】

和文 日本現代女性文化のタイへの輸出—少女マンガと女性雑誌を中心に—

英文 A study on the exportation of Japanese woman culture to Thailand via SHOUJO-MANGA and woman magazine

【メンバー構成】

研究代表者 TOJIRAKARN MASHIMA

幹事

メンバー

【ねらいと目的】 (600 字程度)

現在、海外における日本大衆文化ブームからコンテンツ産業を通じて「日本的な」ものがいかに海外進出しているかを指摘する論も数多く出ている。しかし、これまでの議論で各国の社会文脈に基づいた「消費」という点が見落とされてきた。同じ日本のものでも、輸出されたものとなると、輸出先の国の社会的文脈から切り離して考えることは不可能である。日本の文化はそのまま輸出されるわけではなく、輸出過程の中で選別され、選択されたものだけが海外で「日本文化」として消費される。そして、その選択基準は輸出先の国の社会的価値観によって異なっていく。その意味では、輸出とは異文化の出会いと衝突である。特に、日本と違う女性に対するジェンダー規範が確固としてある東南アジアへの輸出において、そういった衝突が、世論の日本文化に対する否定的な態度と出版における情報規制という形でみられる。本研究では、タイにおける日本少女マンガ・女性雑誌の普及を歴史的に整理し、タイに輸出された日本少女マンガ・女性雑誌と、日本で出版されたオリジナルのものとの紙面を比較検討することで、輸出過程の中で行われる情報選別のあり方を検討する。具体的にはまず、出版メディアを通じて、日本の女性文化はどのように受容、消費されているか、また、日本文化に対する世論、公論の変化によって、日本文化の受容がどのように変化してきたかを見る。

【活動の記録】

研究会・ワークショップの場合は、開催年月日、報告者と報告題等

調査の場合は、調査年月日、調査者、調査地、調査目的等

その他の活動も含めて、研究期間中の活動について簡潔に記してください。

2010 年 10 月 20 日 バンコク市内にて子ども向け学習マンガ出版社 E.Q.PLUS に対するインタビュー

2010 年 10 月 22 日 バンコク市内にて海賊版少女マンガの表紙職人・元編集者に対するインタビュー

2010 年 10 月 28 日 バンコク市内にてマンガ出版社 Nation Edutainment の編集長に対する取材

2010 年 10 月 22 日 共同研究「戦後日本におけるジェンダーとセクシュアリティの歴史研究」例会にて研究発表

2011 年 02 月 21-23 日 National University of Singapore 取材の国際シンポジウム Women's Manga Beyond Japan: Contemporary Comics as Cultural Crossroads in Asia に参加し、“What does it take to be ‘Thai shojo manga’? A case study of Localization.”という題目で発表を行った。

【成果の概要】（800 字程度）

タイの場合、少女マンガ出版には、常に「性」の問題がつきまとう。女性が性的なものに興味を持つことをよしとしない性的規範は、タイにおいても強く作用している。男女関係が物語上の重要な要素であり、かつ若い女性をターゲットとする少女マンガが、こうした規範の下で大きな制限を被ることはいうまでもない。タイの国内法において、テレビや映画などの映像メディアについては性描写を規制する条項が明文化されている一方、出版物については明確な規定が存在しない。にもかかわらず、マンガについての（自主的な）性表現規制は海賊版時代から確認されている。

現地調査から小学館から出された性描写が含まれている未成年少女マンガ（以下抱かれ系少女マンガ）は海賊版時代（1980 年代－1990 年半ば）から輸入されていたことが分かった。そうしたマンガを消費する読者層が拡大されていたことが推測できる。海賊版時代出版のノウハウを受け継いでいる正規版時代（1995 年－現在）でも同じく、小学館の少女マンガ作品を輸入しており、その中でも抱かれ系作品や抱かれ系と同じマンガ雑誌で掲載されている作品が多く含まれている。また、数は多くないが性描写が含まれている成人女性向けマンガ作品も輸入されている。

正規版時代においても少女マンガにおける性表現は常に問題しされ、セックスシーンを読者にみせないよう表現の自主規制が行われてきた。そして、2000 年代後半から少女マンガに対する年齢指定制度が導入された。しかし、性描写のある作品を分類し、読者が年齢に合う作品を選択するための目安であるはずの年齢指定制度が、きちんと機能しているとは言い難いのが現状である。

年齢指定の基準は自主的である。年齢指定があるからといって、高年齢指定の作品の表現が低年齢指定作品より開放的というわけではなく、年齢指定の実質の差が不明である。その中で、抱かれ系作品における性描写が激しかったため、年齢指定の基準全体はそれによって引き上げられ、混乱が生じる。性描写のない作品までも年齢指定が行われ、逆に性描写のある成人女性向けの作品が低い年齢指定を受けるなど年齢指定基準に混乱が見られる。その結果、性的表現のない作品も性表現のある成人女性向けの作品も同じ年齢指定を受けてしまう。

タイでは少女マンガは本来様々な年齢層むけに作られたという認識が弱いこともあり、年齢指定の対象なっていること自体が「少女マンガ＝悪書」というイメージを作っている。その上に年齢指定制度の混乱が「日本少女マンガ＝過激性表現」という先行イメージを作っている。マンガを取り上げる評論者の言説からその態度が明らかである。各出版社の主観的な年齢指定がタイにおける「少女マンガ」というジャンル全体的のイメージに影響を与えているといえる。

【通信欄】

（研究代表者記入）

プロジェクト	<input type="checkbox"/> 次世代	<input checked="" type="checkbox"/> 次世代ユニット	<input type="checkbox"/> 男女共同参画に資する調査研究
経費	予算額	180 (千円)	実績額 178,107 円